

# スリランカ現代社会における呪術観 - ドーサという概念を中心に

## Religious Beliefs and Practices in Contemporary Sri Lanka, *Analyzed Through the Concept of Dōsa*

Dr.J.A.Nandana Jayakody

近代化と共にスリランカ社会には大きな変化がもたらされてきているが、人々はその近代化においてもたらされた思想をそのまま受け入れているとは言えない。彼らは、代々受け継いできた精神に残されている宗教的な認識を通して判断し、自分に適応させるように変容させて、受け入れているのである。彼らは、人生で直面する病気や災い、近代化によって苦悩と認識されるようになったカースト、貧富の差や性差などによって悩んでいたが、それ程大きな悩み事として受け止めていない。自分が生きている状況をありのまま受け入れ、それに抗うのではなく自分ができ得る最上の方法をもって現在の状況をより良いものへと変えることによって暮らしている。その理由は人々が生まれながらに仏教的な考え方によって自分や周りの物事を認識していることによる。仏教的な教えに従えば、変更できない状況を来世で変更することができるので大きな悩みとして苦しむ必要はないのである。

スリランカにおける民俗宗教のあり方を考察することで、人々が直面する様々な状況を説明することが可能となっているが、その状況を良い方向に転換できるものは限られているのである。変更できる状況を必要に応じて変更するための科学的な方法もあり、また呪術的な方法もある。

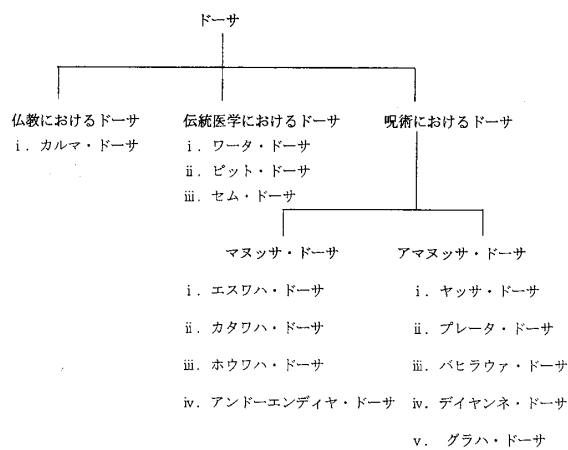
スリランカの村落社会には近代化によって

大きな変化がもたらされたが、その根底には今なお個人個人の精神に残る仏教的な世界観があり、それと融合した呪術的思考、すなわち民俗宗教の世界観に基づいて自分が直面する様々な状況や物事を理解し、安定を得るという特徴がある。ドーサ（障り）という概念を通してこの特徴を検討することができる。

### ドーサ Dōsa という概念

スリランカ社会において日常生活で直面する説明不可能な状況を理解するためには、神霊に関するドーサ（障り）及びワーサナーヴァ Vāsanāva（運命）についての解釈が重要である。病気や災いによって人が直面する不幸を説明する時、ドーサという概念が重要になり、幸福を説明する時ワーサナーヴァという概念が用いられる。ドーサとは「障り」あるいは「悪影響」に近い意味を持つ言葉であり、サンスクリット語のドーシャに由来する。ドーサという概念は、仏教や伝統医学または呪術などそれぞれによって様々な形で解釈されており、神霊による影響とも深い繋がりを持っている（表1）。

表1. ドーサの種類



現地調査を基に筆者作成

## I. 仏教におけるドーサ

### i. カルマ・ドーサ

仏教的な解釈によると、人間のドーサや運命には前世での行為（仏教に示されている悪行あるいは善行）によって生れつきもっているカルマ *Kárma*（業）が影響する。シンハラ人は軽い病気から事件や事故のような災い、カースト、貧富の差など全ての状況はカルマ・ドーサ *Kárma dōsa* として捉えている。人間は、カルマによるドーサから解放されることはできない。そのため仏教的な諦観は、カルマによる運命やドーサに従う、或いは“運命に従う”ことである。見方を変えれば、女性差別などの印象が正面に出てしまう性差も、実際には彼らにとってそれほどの圧力といったものは感じておらず、ごく当たり前の自然なこととして受け止められている。女性であれば、カルマによって女性として生まれたので、女性としての役割あるいは妻としての役割を果たさなければならない。男性と平等になることはカルマに従うことに違背し、輪廻のサイクルを長くする原因となるパウ *Pau*（罪）を集めることになる。そして結局来世でよい生まれ変わりができなくなる一方、こ

の世で被ったカルマが再び来世にも展開されるのである。そのため、女性としての役割を果たしながら最終的に来世で良い生まれ変わりをするため、あるいは輪廻のサイクルを止めるためには、カルマに従う生活をしながら功德を集める必要がある。近代化によって社会が大きく変化しているが、仏教におけるカルマ・ドーサによる考え方は、未だにシンハラ人の精神に残っていると見える。

## II. 伝統医学におけるドーサ

紀元前3世紀に仏教と共にインドの古典医学（アーユルヴェーダ）がスリランカに伝来したとされている。アーユルヴェーダの古典医学書であるスッスルタ・サンヒタ *Suśruta Sámhitā* とチャラカ・サンヒタ *Cáraka Sámhitā* によると、人間の体は i. ヴァータ *Váta*（風）、ii. ピッタ *Pitta*（胆汁）、iii. セム *Sem*（粘液）という3つの構成要素（トゥンドス *Tundos*）からなり、元気な人はそれらの均衡が保たれているとされている（トゥンドス・サマナヤ *Tundos Sámánaya*）。人が病気になるというのはその構成要素の均衡が崩れたということ（トゥンドス・キピーマ *Tundos Kipīma*）であり、病気によってどの構成要素が崩れたかはアーユルヴェーダによって認識される。例えば、風の均衡が崩れたため起こった病気であれば、その病気の原因はヴァータ・ドーサと呼ばれる。治療方法としては、体内の通常の均衡を回復させるため、これらのドーサに対して反対の効果を及ぼす食物や薬を投与する。そして、神々や悪霊、死霊、星などの影響で起こる病気や災いを無効にするために呪術的儀礼を行う必要があるとされている。

### Ⅲ. 呪術におけるドーサ

スリランカの民俗宗教におけるドーサに対する解釈は、アーユルヴェーダĀyurvēdaにおける解釈と仏教的な解釈とが融合している。つまりアーユルヴェーダのヴァータ、ピット、セムという3つの構成要素の均衡と仏教におけるカルマ・ドーサの多少に重点をおいている。民俗宗教におけるドーサとは、病気だけではなく、人間が直面する不幸の全ての原因となり、そのドーサの原因によってI. マヌッサ・ドーサ（人間によって引き起こされるドーサ）とII. アマヌッサ・ドーサ（非人間即ち神霊によって引き起こされるドーサ）という2つに分けられる。そのドーサを呪術的な力で和らげること、あるいは完全に祓うこともできると考えられている。

#### i. マヌッサ・ドーサ

マヌッサ Mánussa という言葉は人間という意味であり、人間の精神によって他人に及ぼすと思われている悪影響はマヌッサ・ドーサと呼ばれている。例えば、他人を嫉むとき或いは他人の物が自分の物より良いということを見て羨むなど自分自身の中に思わず起こる嫉妬のような感情であり、それによって対象になった人あるいは物の良い状況が衰えていくと信じられている。マヌッサ・ドーサの原因となる人の中の嫉妬的な感情の起こり方によってマヌッサ・ドーサは以下の4種類に分けられる。

##### ① エスワハ・ドーサ āsvāha dōsa

人やものなど外見の良い状況を見ても、自分よりも、あるいは自分のものより優れていると認識すること

##### ② カタワハ・ドーサ Kátavāhá dōsa

人やものなど外見の良い状況に驚き、その感情を言葉で表現すること

##### ③ ホウワハ・ドーサ Hōvāhá dōsa

人やものなど外見の良い状況を見て、自分あるいは自分のものがそのようではないということに嫉妬すること

##### ④ アンドーエンディヤ・ドーサ Ándōāndiyá dōsa

人やものなど外見の良い状況を見て、自分あるいは自分のものがそのようではないと、自分自身で文句を言ったり他人に愚痴をこぼしたりすること

マヌッサ・ドーサを認識し無効にする儀礼

マヌッサ・ドーサとして考えられるエスワハ・ドーサヤカタワハ・ドーサなどによる災いはスリランカに少なくない。調査地の村にはエスワハあるいはカタワハなどドーサを持っていると思われる人がいる。元気な子供が彼らに見られると病気になるよく実がなる木が枯れる、あるいは実が成熟する前に落ちる、乳牛から乳が出なくなる、商売だと赤字になる、そのような状況が起こった場合、当事者は過去を思い出してみると、エスワハヤカタワハなどのドーサを持っている人に見られたり、話しかけられたりしたことを思い出しまヌッサ・ドーサにかかっていると認識する。

マヌッサ・ドーサの影響で病気になった人間や、動物または植物がマヌッサ・ドーサにかかったと考えられる場合、ワトラ・メティリーマ Vátura mātīrīma（呪文が唱えられた水をエスワハ・ドーサヤカタワハ・ドーサにかかったとされる人や物にかける）儀礼やデヒ・ケピーマ Dehi kápīma（清めの作用があると考えられているライムを切る）儀礼が行われる。

#### ii. アマヌッサ・ドーサ

マヌッサ（人間）ではない存在すなわちアマヌッサは神霊という意味であり、様々な神霊によって及ぼされる悪影響はアマヌッサ・

ドーサと呼ばれている。アマヌッサ・ドーサは影響を及ぼす神霊の種類によって、①ヤッサ・ドーサ Yásṣa dōsa、②バヒラウァ・ドーサ Bāhirava dōsa、③プレータ・ドーサ Prēta dōsa、④デイヤンネ・ドーサ Deiyānne dōsa、⑤グラハ・ドーサ Grāhā dōsa という5つに分けられる。村人自身で病状あるいは災いの様子によってどのような神霊の影響が及んでい

るのかということがわかることもあり、他人に説明されることもある。周辺に住む星占い師にホロスコープを読んでもらうと、当事者は現在、どの星のどのような影響を受けているのかということが分かる。その星の影響によって人の運命やかかりやすい病気、とり憑かれやすい悪霊などが明らかになる(表2)。

表2 グラハ・ドーサ、アーユルヴェェダにおけるドーサと呪術におけるドーサ

	かかっている グラハドーサ	古典医学におけるドーサ	呪術におけるドーサ (とり憑きやすいヤカー)	なりやすい病気や病状	呪術的儀礼
1	ラフィ	ピット(胆汁)	リーリ・ヤカー	血管に関する病気 頭痛、水疱瘡、天然痘	イラムドン・サマヤマ
2	チャンドラ	セム(粘液)	サンニ・ヤカーの種類	体温が下がる 治療が遅れると体の一部が不自由になる	サンニ・ヤクマ
3	クジャ	ピット	リーリ・ヤカー	血が悪くなる、皮膚病気	イラムドン・サマヤマ
4	ブダ	ヴァータ(風)	ゴボルヤカー	体の痛み、悪夢で熟睡できない	サンニ・ヤクマ 治療が遅くなるとデヴォルサマヤマ
5	グル	ピット	ケヘタ	だるさ血管の病気	パリ儀式
6	シュクラ	ピット	サンニ・ヤカーの種類	泌尿器の病気、黄疸、糖尿病	サンニ・ヤクマデヴォル・バーガヤ
7	サニ・セナスル	セム	プレータ	鼻炎、喘息	ベレータタディマ、クラティンドワ儀礼
8	ラーフ	ピット	マハソホン・ヤカー	不思議な音など衝撃で熱が上がる	マハソホン・サマヤマ儀式
9	ケート	ヴァータ	ゲワラヤカー	下半身麻痺	ベレータタディマ ニーチャ クラティンドヴァ儀礼

現地調査を基に筆者作成

古い師だけでどの神霊に影響されているか判断されれば、それがヤカーやバヒラウァ、ブータ、プレータであれば、ヤカドゥラーに相談し、神であれば、カプマハタに相談する。これらの呪術師は当事者の病気、あるいは直面している不幸や災いを調べ、その人がどのような神霊によるドーサの被害者になっているのかを認識する。そしてそのドーサを無効にするための呪術的儀礼を行う。

#### ① ヤッサ・ドーサ

ヤッサ・ドーサとは、悪霊(ヤカー)の影響の原因となる病気である。ヤカーの種類は様々であり、それぞれのヤカーの影響による病気や病状も様々である。呪術師がヤッサ・

ドーサにとり憑かれた患者の表情を調べ、あるいは脈を取ることによってヤカーの中から患者にとり憑いたヤカーを認識し、そのヤカーを祓う儀礼を行うと病気が治る(表2)。

ヤッサ・ドーサはグラハ・ドーサとも関係を持つ。人に悪影響を及ぼすと思われる星々によって、とり憑きやすい悪霊たちが決まっている。一方、影響を及ぼしている星が良い場合は、ヤッサ・ドーサにとり憑かれにくいと考えられている。

#### ② バヒラウァ・ドーサ

バヒラウァというのは悪霊の一種であるが、土地や財産を保護していると思われる神霊として仏教流入以前から存在していたのではな

いかという意見もある [Paranavitana1929 : Vol.31]。

宝石の採掘のために地面を掘る前や新築前など土地に関する仕事を開始する前にバヒラウァへのプージャー儀礼を行うことが一般的である。調査地でバヒラウァへのプージャー儀礼として良く見られるのは新築儀礼である。この儀礼は、ヤカドゥラーあるいはアールダ・カプマハタによって新築する前日の夜7時ぐらいから始まり、翌朝6時まで新築予定地で行われる。まず、呪術師によって、土地の4方向にバヒラウァのために建てられた棚に花や食べ物が供えられ、新築予定地にお守りとして埋めるために準備する米や海の砂など(ニダン・ヴァスト Nidán Vástu)を入れたコンクリートの塊(ムラガラ Muragála)に対し呪文を唱える。そして翌朝6時から7時まで他の呪術師が仏教のピリットを唱えながらニダン・ヴァストを埋め、建築を始める。

新築前にこの儀礼を行わなければ、居住開始前にその儀礼を行う必要がある。そうでなければ、バヒラウァから家や家族を保護されなくなり、バヒラウァや他の悪霊の影響(バヒラウァ・ドーサ)で病気や災いが起こると信じられている。

### ③ プレータ・ドーサ

プレータは、神霊段階の最も下に位置しており、人間に悪影響(プレータ・ドーサ)を及ぼすと思われている。プレータ・ドーサは、i. プレータが人間に憑く場合、ii. 呪術師がその力で人間にとり憑ける場合によって起こる。i. の事例として、仲が悪かった親戚や隣近所の人が死亡し、プレータ状態になってとり憑き病気にさせたり、災いを起こしたりすることがある。逆に、仲が良かった人にはプレータ状態になってから仕事を与えたり、生活を豊かにさせたりして助ける。プレータ・

ドーサに関するこのような事柄はスリランカではごく普通である。

プレータ・ドーサの対象には人間だけでなく、動物や家、土地なども対象になると思われる。例えば、家の場合、プレータはそこに住む人間を夢で驚かしたり、首を絞めようとしたり、食べ物にゴミを入れたり、また、そのプレータ・ドーサの影響で家族のメンバーが若いうちに不治の病で死んだりする。土地の場合、そこで栽培が上手くできなくなる。

### ④ デイヤンネ・ドーサ

神々を原因とする、あるいは神々に関係する病気や災いをデイヤンネ・ドーサと呼ぶ。天然痘、水疱瘡、ペストなどの病気は、デイヤンゲ・レダ Deiyánge leda (神の病気)と呼ばれている。特にパッティニはそのような病気の予防の神として知られ、その病気がひどくならないように、または他人への感染を防ぐために、カプマハタはパッティニ女神を対象としてプージャー儀礼を行う。村ごとに定期的・集団的に行われるガン・マドウァやデヴォル・マドウァ、プーナ・マドウァ、キリ・マドウァ、パハン・マドウァ、コホバーカンカーリーヤのような儀礼の目的は、神々を楽しませ、神々や悪霊による全てのドーサを無効にし、村や地域の安全や無病または幸福を願うことである。調査地ではデヴォル・マドウァが盛んに行われており、個人的にデイヤンネ・ドーサを無効にするためにキリ・ダーナ儀礼やパッティニ・プージャー儀礼が行われている。デヴォル・バーガヤという儀礼はヤッサ・ドーサと同時にデイヤンネ・ドーサが原因となる病気を治すために行う個人的な儀礼である。ヤッサ・ドーサの影響でなる病気は治せる期間が決められており、その期間中に悪霊祓儀礼を効果的に行うことができなければ、悪霊は続けて患者を病気にさせるために神々

から許可をもらうという考えがあり、そうなった場合、悪霊だけでなく、神々も対象にしたデヴォル・バーガヤ儀礼を行わなければならない。その儀礼の構成には、ヤカドゥラーによって悪霊を対象に行われるスーニヤマ儀礼の部分と、カプマハタによって神々を対象に集団的に行われ村や地域の五穀豊穡や無病息災を願う神祭りであるデヴォル・マドゥアという儀礼の部分との融合の形が見られる。

#### ⑤グラハ・ドーサ

スリランカでは人間の一生に星（グラハ・デヴィヨ Graha Deviyo）（表3）の影響が強く関わっていると考えられており、星による悪影響のことをグラハ・ドーサ、あるいはグラハ・アパラ Gráhá ápala という。シンハラ民俗宗教における星は、神々と悪霊の間の位置を示しているためグラハ・デヴィヨ（星神）またはグラハ・ヤカー Gráhá yákā（星悪霊）とも呼ばれている。星呪術では人間の人生と関わる以下の9個の星神（ナウァグラハ・デヴィヨ Návágráhá Deviyo）が示されている（表3）。

表3 九個の星（ナウァグラハ・デヴィヨ）

- i. ラヴィ Rávi（太陽）Sun
- ii. チャンドラ Chándra（月）Moon
- iii. クジャ Kuja（火星）Mars
- iv. ブダ Budha（水星）Mercury
- v. グル Guru（木星）Jupiter
- vi. スッカラ Shukra／キヴィ Kivi（金星）Venus
- vi. サニ Sáni／セナスル Senasuru（土星）Saturn
- viii. ラーフ Ráhu
- ix. ケート Kētu

シンハラ人は生まれた日時に基づいて星占師（ネカットカル）によって天宮図（ケーンドラ或いはホロスコープ）を作ってもらう。そこにはその人の生まれた時の星の位置（ラグナ）とそれに合わせて決定された当人の一

生が表されている。そのためケーンドラによって危険な時期あるいは病気になりやすい時期が分かるのでその間に気を付けることができる。また良い期間を選んで、人生における重大なことを行うことができる。

占星術では、9個の星の動き方（ラーシチャッカラ Rāshichára）が人間に悪影響、あるいは良い影響を及ぼすと教えられている。例えば、スッカラ Shukra 星が人に対して良い方に位置している時は、その人に幸福を与えることができるが同じ星が悪い方に位置している場合は、泌尿器の病気で苦しむと言われている。人間はグラハ・ドーサから解放されることはできない。しかし、バリ・アドゥラー（星に関する儀礼を行う呪術師）によって行われるバリ儀礼によってグラハ・ドーサを和らげることができると考えられている。

#### IV. アーユルヴェーダにおけるドーサと呪術におけるドーサの関係

アーユルヴェーダでは、ドーサとは人間の体を構成している構成要素の均衡が崩れることだという解釈だが、他方民俗宗教では西洋医学による病原解釈にも同意している。しかし、民俗宗教で強調するのは、その病原にマヌッサ・ドーサあるいはアマヌッサ・ドーサが関わっているということである。そのため、人々はアーユルヴェーダあるいは西洋医学の治療を受けながらも呪術的な儀礼をも行うという多元的医療が見られる。

#### V. グラハ・ドーサと仏教におけるドーサの関係

グラハ・ドーサは仏教におけるカルマ・ドーサと深い関係を持っているという。調査地の

星占い師であるシリヤーウァティ *Siriyāwati* (51歳の女性)によると、人は前世での行いによって積んだピン *Pin* (功德) あるいは犯したパウ *Pāv* (罪) によって決められるカルマ (業) に合わせてこの世に生まれ変わり、その一生が決定されるというのが仏教の基本的な教えである。ここでシリヤーウァティが強調するのは、星占いに現れる宿命 (グラハチャーラヤ *Grāhāchāraya*) は人の生まれた日時に天に現れたそれぞれの星の影響であり、その星の影響が先に述べた仏教のピンやパウによるカルマと共通しているというのである。人の宿命をより強く示しているのはカルマであり、そのカルマの悪影響がカルマ・ドーサであって、このカルマ・ドーサから逃れることはできない。カルマとグラハチャーラヤが共通しているとすれば、同様にグラハ・ドーサも完全には無効に出来ないと考えられている。ただし、グラハ・ドーサは儀礼や治療によって和らげることはできると言う。

また、星占いによってグラハチャーラヤが非常に良いと判断される時期であっても、悪い事件が起こり、逆にグラハチャーラヤが非常に悪いと判断される時期であっても、良い事件が起こることがある。それは、星占いからでは把握することのできない、隠れたカルマ・ドーサがあると解釈されるからである。

グラハ・ドーサは個人一人にのみ影響を及ぼすのみならず、身内にまで影響を及ぼすと考えられている。例えば妻の星回りが良い場合、その良い星の力が夫の星回りに影響を及ぼし、夫のグラハ・ドーサが好転するという (表3)。

## VI. グラハ・ドーサとアーユルヴェーダに述べられるドーサとの関係

星が人に悪影響 (グラハ・ドーサ) を及ぼ

している時、その星によって、アーユルヴェーダの言う人間を構成する3要素、ヴァータ (風)、ピット (胆汁) そしてセム (粘液)、のバランスが崩れやすいと考えられている。例えば、セナスルアパラ *Senasuru Āpala* (土星による悪影響) が及ぼされている人であれば、セム・ドーサにかかりやすいのでセム・ドーサを引き起こすと考えられる食べ物や飲み物を避け、グラハ・ドーサの影響を和らげるために呪術師が呪文を唱えたヤントラを首につけることを星占い師から指示されるのである。

## VII. グラハ・ドーサと呪術における他のドーサとの関係

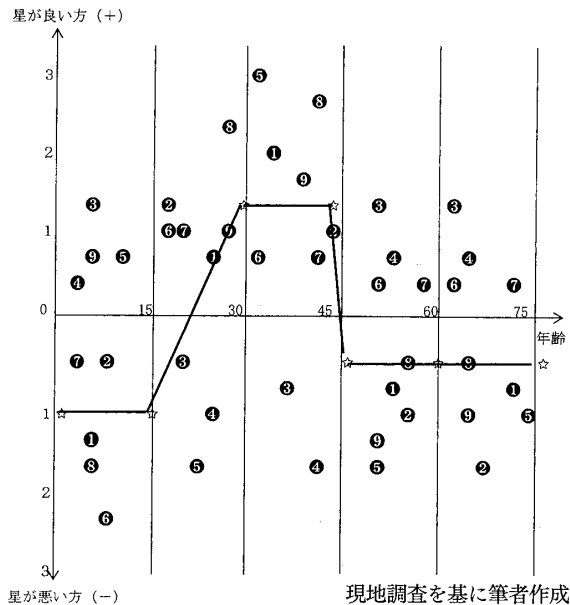
呪術において言われているドーサの悪影響を受けている場合、その時期に関わっているグラハチャーラヤが悪い方に位置していれば、簡単にそのドーサによる病気や災いが起こる。しかし逆にグラハチャーラヤがよければ、呪術におけるドーサの対象になっても悪影響を受けることもなく無効になる。スリランカで有名な「カラ・ホンダナム・ガレー・ゲフヴァット・メレンネ・ネー *Kāla hoṇḍāṇām gālē gāhuvāt mārenne nā*」 (星がよければ、人を岩に投げても死なない) という諺もその宗教的な背景を表している。そのため、調査地のある呪術師は、人に呪いをかけるコディウィナ儀礼を行うためには、その人のホロスコープを調べ、星が悪影響を及ぼしている時期を選ばなければならないと言う。つまり、関わっている星が人にどのような影響を及ぼしているかによって、その人を対象として行う呪術的儀礼の効果や、西洋あるいはアーユルヴェーダによる治療の効果が決まるということである。

人に関わっている9個の星 (ナウァグラハ) は悪い方にも良い方にも位置していると考え

られている。しかし、良い方或いは悪い方に位置している星の数の割合、星の力、良い方に近づいている程度によって人の運命が決められる。人の歳と共に変わっていくこの星の動きをその人のグラハチャーラヤ（星回り）という。グラハチャーラヤによって、その人に影響する他のドーサが無効にされる可能性も生じる。

図1は、9個の星の位置によって人のグラハチャーラヤがどのように決められるのかを占星術師の説明をもとに概念化し、それを表すための概念図を作成した。

図1 Xさんのグラハチャーラヤ概念図



黒丸数字(①～⑨)は先に述べた9個の星一覧にあるそれぞれの番号を示す。その星々の中間軸(同時に年齢をも示す)を基線に、年代によってグラハチャーラヤがその良し悪しの程度を示す位置に移行していることを概念的に示している。

図によるとXさんの15歳までを見ると、9個の星のうち5個が悪い方に、4個が良い方に位置している。またその悪い方にある③と⑥という星が中間軸から離れ、より悪い方に近づいているが、それに比べて良い方にある

4個の星は、良い方にあるとはいえ、その程度はあまり良いとは言えない。そのためXさんのグラハチャーラヤは相殺して悪い方の1に位置すると判断される。Xさんの15歳から30歳までの時期には、以前悪い方にあった①、②、⑥と⑧という星が良い方に動き、以前良い方にあった③、④と⑤という星が悪い方に移っている。しかし悪い方に星があるものの、⑧がより良い方にあるためXさんのグラハチャーラヤが良い方に向かって上がっている。30歳から45歳の間は悪い方に星が2つで良い方に7つの星が位置しているのでXさんのグラハチャーラヤが最も良い期間である。

Xさんのグラハチャーラヤによると、15歳になるまで①、②、⑥、⑦、⑧という星が悪いので、その時にかかりやすいドーサや病気、またはとり憑きやすい悪霊が決まっている(表6)。例えば、15歳になるまで⑥番の星である金星が悪い方の2よりも下に位置しているので伝統医学で説明されるピット・ドーサにかかりやすい。泌尿器の病気、黄疸や糖尿病にかかりやすいと判断されるので15歳になるまでそれらの病気に気を付けるように占い師に言われる。さらに、呪術によるとXさんはその時期にサンニ・ヤカーにとり憑かれやすいので、孤独にならないようにまたは揚げ物など悪霊に好まれるものを食べないように注意を受ける。サンニ・ヤカーにとり憑かれた者は一般にサンニ・ヤクマ儀礼を行うが、Xさんがこの時期にサンニ・ヤカーにとり憑かれてしまうとサンニ・ヤクマ儀礼を行ったからといって病気が治るとは限らない。それはXさんに関わっている他の星の多くが悪い方に位置しており、治ることを邪魔していると説明されるからである。

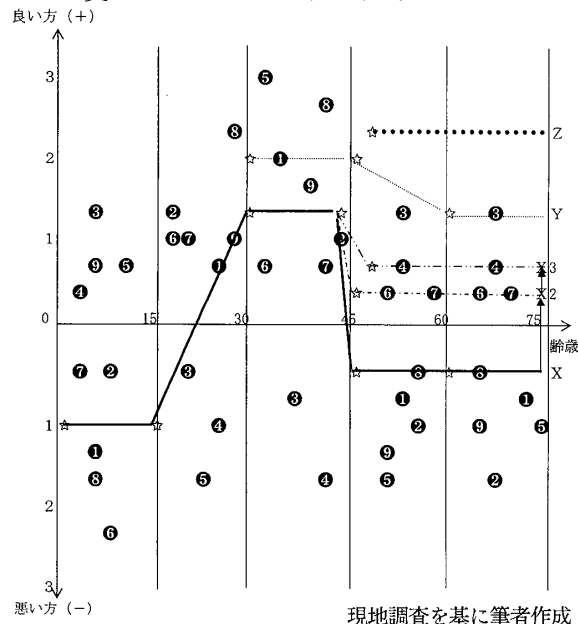
Xさんのグラハチャーラヤの最も良い時期は30歳から45歳までであり、病気や災いの



心配が少ない。水星が悪い方に位置している影響で病気や災いが起こる可能性があるにしろ、他の星の多くが良い方に位置しているため、それらの病気や災いが排除されることが多いという。45歳を過ぎてからXさんのグラハチャーラヤは再び悪くなり、悪い状況がそのまま続くようになっている。

グラハ・ドーサは身内にまで影響を及ぼすと考えられている。図2は結婚後に妻と子供のグラハチャーラヤが良かったために変化したXさんのグラハチャーラヤを表している。

図2 妻と子供のグラハチャーラヤによって変わるXさんのグラハチャーラヤ



現地調査を基に筆者作成

X : Xさんのグラハチャーラヤ

X2: 結婚後のXさんのグラハチャーラヤ

X3: 長男誕生後Xさんのグラハチャーラヤ

Y : Xさんの妻のグラハチャーラヤ

Z : Xさんの長男のグラハチャーラヤ

図2によるとXさんのグラハチャーラヤは45歳から悪くなりそのまま続くようになっているが(本線:X)、45歳で結婚した時に妻のグラハチャーラヤ(点線:Y)が良かったため、その影響によりXさんのグラハチャーラヤは良い方に上がっている(一点鎖線:X2)。Xさんが46歳の時に生まれた子供のグラハチャーラ

ヤ(二重点線:Z)は妻よりもさらによい方に位置しているため、Xさんのグラハチャーラヤはさらに良い方に上がっている(二点鎖線:X3)。

星占いには上述したように特定の考え方があってもそれが当てにならない場合もある。例えば、星占いによってグラハチャーラヤが良いと判断されたXさんの場合、30歳から45歳までの間に交通事故に巻き込まれても、大きな病気にかかっても不思議ではない。悪いと判断された時期に良いことが起こることも十分あり得る。それは、星占いからでは把握することのできない、前世で自身が行った悪行による隠れたカルマ・ドーサがあるからだと解釈されるためである。

このような宗教的な背景による考え方によって、人々が治療を受けたとしても、また呪術的な儀礼を行ったとしても、そして期待した効果が出なかった場合であっても、その治療あるいは呪術的儀礼に関する信用が薄れることはない。このような状況が背景にあるため、現代社会において民衆からエリートにいたるまでの広範囲にわたって呪術が受け入れられ続けているのではないかと考えられる。